

# 干支



網走医師会  
網走脳神経外科・リハビリテーション病院

橋本政明

去年の7月から体調を崩した94歳の父は、私の病院で入院生活を送っている。10月には孫の披露宴に出られるはずであった。しかし、直前になって体調を崩し、披露宴への出席はかなわなかった。代わりに、名古屋から孫とその婿が会いに来た。使命を果たし終えたと感じたのか、気丈であった父がその数日後から、つじつまの合わないことを言い始めた。今では私のために、口座にある4兆円を自由に使う、とスタッフに吹聴しながら、この田舎で不自由のない入院生活を送っている。これも地域に医療があればこそだ。

私が世間と距離を置きつつリベラルな個人主義者を気取っていた自分の愚かさに気付いたのが、干支の4巡目だった。その人は、バブル期に生まれた。同世代のわが子と違うのは、小学生の時に母を亡くし、高校1年で父を亡くしたことである。どんな家庭で生まれ育つかは、本人の努力ではいかんともし難い。自由な競争には手続きと機会がある。手続きは個人が自律的に選択できる積極的自由(への自由)と、他者からの干渉を免れる消極的自由(からの自由)からなる。高学歴で裕福な両親を持つ学生が受験で有利だということは、機会均等であっても個人は自由を享受できない可能性を示唆している。

積極的自由には結果の平等や公共性にも幾分かの配慮が必要となる上に、政府がそれを担保しなければならぬ。だからパターナリズムを嫌うリベラリストは、この手の自由を好まない。民主主義は、端から平等化と自由の拡大の両立などできない代物だ。すべてを市場における価格調整機能に任せ、結果については自己責任とすべきだ、というネオリベリズム・市場原理主義は、自由を謳歌できる人とそうでない人の格差など歯牙にもかけない。カール・マルクスの思想や法、政治の制度といった上部構造は、経済活動という下部構造によって決まっているというのは、あながちウソではない。ウォール・ストリートのマナー資本主義、中国のような拝金主義の社会では、すべてにおいて自己利益が優先され、格差は拡大するばかりだ。

戦後、高等教育が変わり教養が軽視されたのに反比例して、実用主義が経済成長を促した。不思議なことに、デカルトを知らない人がデカルトの格言に従っているかのように振る舞う世の中になってい

る。原子のようなバラバラの個人は、他者との関係性より消極的自由を求め、自分と家族・友人からなる小さな私的世界に閉じこもる。社会的・政治的紐帯が希薄になった個人は、公的な事柄に関心を持たないし、民主主義など吹く風だ。職業選択の自由は社会的流動性を高めた。短期間に入れ替わる富裕層は共通の精神と伝統を持った貴族階級にはなりえず、エリートに課せられた義務(noblesse oblige)は死語となり、弱者救済に関心を持たないことを他者への不干渉と呼ぶようになる。

アリストテレスは、「人間は生来、ポリスの動物である」と言った。人間が社会を形成する理由は、よりよい生活を送れるからだ。事実、人類は知識や技術を共有し、次世代に伝え改善を重ねるといった世代を超えた協力関係によって文明を発展させてきた。ここで私は、文明とは「人の安楽と品位との進歩」のことであり、文明をもたらすのは智と徳である、と説いた福沢諭吉を思い起こす。諭吉は、智によってより快適な生活が可能になり、徳によって品位は向上する、とも言う。努力や人間関係が評価される文明社会であるためには、共有やコモンズといった発想、さらには哲学や倫理が不可欠だ。これらを軽視した結果が、自己の利益を最大化させるよう合理的に振る舞う人間の集合である。それが地域医療崩壊と無関係とは、私には到底思えない。だから、徳のある人間を養成すべき、とあえて提言したい。

徳を身に付けた人間とは、社会の現状に対する的確な認識・分析ができ、情報リテラシーに秀でた人間のことで、徳のある人間は、よりよい未来社会というビジョンを抱き、パッションを持って明るい将来を実現しようとするイノベーターでもある。センス(sense)とは、慣性という意味とともに方向(付け)という原義を持つフランス語だ。センスを磨くことで、目標に至るべき合理的道筋を構想するためのパースペクティブ(視座)を持てるようになる。だから、専門教育偏重ではなく、教養教育の重要性を見直すべきなのである。なぜなら教養とは、西洋世界で醸成された概念や理念、社会装置を歴史的視座から吟味しながら、自らのものにしていくことだからだ。ヨーロッパの基層文化を学ぶことで、世界や私の現在を歴史的視座のもとに定位し、分析でき、現代世界の構造的理解も得られるのである。このパースペクティブがあればこそ、自分の自由を制限しても共同体のことを考えようと思うのだ。教養なしに今後の社会が歩むべきビジョンなど見いだせないだろうし、地域医療を守る医師の使命に気付けるわけがないなどと、教養もないくせにのたまう私は、今まさに干支の5巡目の終焉を迎えようとしている。